

氏名(本籍)	平山満義(福島県)
学位の種類	博士(教育学)
学位記番号	博乙第1,104号
学位授与年月日	平成7年7月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	教育学研究科
学位論文題目	「エノス・認知的パラダイム」による教師効果研究
主査	筑波大学教授 長谷川 栄
副査	筑波大学教授 博士(教育学) 渡辺 光雄
副査	筑波大学教授 佐々木 俊介
副査	筑波大学教授 教育学博士 海保 博之

## 論 文 の 要 旨

### 1. 構成

本論文は、理論編10章と実証編4章の2部で構成され、本文401頁、注・引用・参考資料35頁、補足資料62頁から成る。

### 2. 目的と方法

本論文は、授業における教師の指導効果要因を探索し、その効果を実証することを通して、教授理論を構築することを課題としている。この課題は、教師効果要因を説明する学問的案内図がまだできていないことから、まだ解決されていないと見る。そこで、その学問的案内図を提案し、その有効性を実証することが狙いとなる。

本論文の研究目的は二つある。第一は、アメリカの教師効果研究のパラダイムのもつ問題点を指摘し、それを克服できるパラダイムを新たに提案することである。第二は、提案した教師効果研究パラダイムを用いて、授業場面を中心にして実験的研究を行い、その有効性を実証することである。

研究方法では、第一の目的を達成するために、資料・文献の解釈に基づく立証方法をとる。これが理論編を成す。1950年代以降の「教師効果」等に関する論文を収集・整理し、教師効果研究のレビューを行う。そこに四つの研究パラダイムを見いだすが、教師効果研究を一貫してリードしてきた「P-P (Process-Product) パラダイム」を中心にして、その研究上の問題点を効果要因、要因関係、研究手続き等について批判的に考察する。そして、問題点を解消するための「エノス・認知的パラダイム」を提案するのである。

第二の研究目的を達成するために、授業を用いての実証的方法がとられる。これが実証編となる。自ら創出したパラダイムに基づいて仮説を設定し、これを実証するために、小学校5・6年生の学級を使って授業場面での本実験と検証実験を行う。データは、効果モデルを構成する12種類の観測変数から採集する。学級風土の違いから効果をみるために、「支持的学級風土群」と「抑制的学級風土群」の二つの実験群と対照群とを設けて、研究が進められる。

### 3. 研究結果の概要

第一の目的に関する研究では、アメリカの教師効果研究をレビューした結果、「P-Pパラダイム」「認知媒介的パラダイム」「エスノグラフィックパラダイム」「生態学的パラダイム」の四つが見いだされ、各パラダイムの要因関係の特性が考察される。

次に、教師効果研究の主流である「P-Pパラダイム」を取り上げて、基本的問題点が指摘される。第一は、効果要因とそのデータ採集道具であるシステム観察法の項目との間に生態的妥当性の視点が反映していないということである。第二は、システム観察法の手続きに信頼性が欠けるということである。

こうした二つの問題点を検討した上で、それを克服できるような「エスノ・認知的パラダイム」が提案される。この特徴は、三つある。第一に、生態的妥当性にかなった環境的・認知的効果要因をパラダイムに組み込んでいくことである。こうして、エスノグラフィ的及び認知処理方法が導入される。第二に、システム観察法のもつ弱点の解消を図るために、信頼性のある方法をとることである。つまり、観察者の十分な訓練、採集データの逐一の検定などを行うことである。第三に、設定した効果要因を因果関係的に立証できる方法を導入することである。これは、パス・アナリシスの方法である。

第二の目的に関わる実証編の研究では、まず創出したパラダイムのための効果モデルから二つの仮説が設定される。①生徒の学習結果は教師行動の直接的影響よりも、学級風土と生徒の認知処理の要因の間接的影響をより強く受けること、②生徒は教師の授業運営行動とキュー行動を認知し、自己の学習ストラテジーを媒介的に処理することによって自己の学習結果に影響を与えることである。この仮説検証のために本実験と検証実験が行われる。ここで得られた実験データは、12種類の観測変数に基づいて採集される。

本実験の対象は、エスノグラフィのデータに基づいて抽出された、小学校4校の5年2学級と6年2学級、計4学級(122名)である。その内2学級が「支援的学級風土群」、他の2学級が「抑制的学級風土群」である。データは、算数の「場合の数」の授業に基づいて採集される。その結果として、生徒の学習結果は教師行動要因ではなくて、学級風土や認知処理要因が効果を与えているという、仮説①が基本的に確認される。仮説②については、生徒の学習ストラテジーのほとんどが学習の集中と学習結果に強い影響を与えていることが確認された。こうして、仮説②も基本的に支持された。

次の検証実験は、仮説①のみを検証するものである。実験の対象は、小学校2校5年2学級と6年2学級、計4学級(116名)である。授業は5年「分数」、6年「比例」の各12時間扱いである。データは10種類採集される。その結果、本実験と違って教師行動要因はいずれの群でも学習結果に影響を与えており、本実験の結果を再現できなかった。しかし、学級風土や認知処理の要因は学習結果に効果を与えており、本実験を再現できた。結局、教師効果要因が大きく作用したことで、仮説①は支持されなかったことになる。

全体としては、仮説①は本実験で支持されたが、検証実験では一部しか再現されず、支持されなかった。仮説②は、本実験しか行っていないが、支持された。したがって、仮説の完全な再現ができなかったものの、提案したパラダイムによる教師効果研究の今後の進むべき方向と手順を提示し実証できたことによって、そのパラダイムは教師効果研究の案内図として役立つと結論づけられている。

## 審 査 の 要 旨

本論文は、授業における教師効果要因を理論的に説明する学問的案内図がまだ確立されていないという認識の下に、アメリカの教師効果研究をレビューして、そのパラダイムの批判的吟味を加えて、「エスノ・認知的パラダイム」を新たに提唱する。その上で、このパラダイムによって二つの仮説を立てて、これを小学校の算数の授業を中心の対象にして実験し、いろいろのデータを採って分析し、大筋において仮説を検証し、「エスノ・認知的パラダイム」が授業の教師効果要因の研究にもつ意義づけをしたものである。

わが国の授業研究は1950年代に始まり、それ以降盛んに展開されるが、一定のカテゴリーの下に授業を記録し分析する記述的研究にとどまるものが多く、必ずしもその研究成果は豊かではなかった。本研究はそうしたこれまでの研究の未熟さを克服しようと挑戦して、「エスノ・認知的パラダイム」を創出して、実験的研究を進めて仮説を検証し、その意義づけをしたことは、高く評価することができる。

個別的にみると、第一に、アメリカの教師効果研究に対する批判的検討を幅広くしかも精細に加えていることは、授業研究の発展のために意義が大きいということである。教師効果研究の文献を広範囲に収集して整理し、四つのパラダイムにまとめ、とくに「P-Pパラダイム」を研究方法の面から精緻に検討して、それが批判されている。これは、本研究の前提として行われているが、独立してみても研究の進展をいっそう促す意義をもっているといえる。

第二に、「P-Pパラダイム」の問題点を克服するために、生徒の学習の内実に迫るという立場から教師効果要因を特定できるように、「エスノ・認知的パラダイム」を理論的に吟味して創出したことは、評価できる。しかも、これを因果的に説明できるようにパス・アナリシスを用いて工夫した努力も認められる。このことも、今後の教師効果研究の発展を促進する意義をもつということができる。

第三に、提唱した「エスノ・認知的パラダイム」について授業場面を中心にして実験的研究を進めて、教師効果要因間の関連を明らかにして、仮説を検証したことも、高く評価できる。データの統計的処理において不十分なところがみられること、及び統計的処理の他に個別的な事例研究の必要があることなど指摘されたが、今後の研究においてその隙間が満たされることが期待される。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。